

HOPE *Bourgogne*

シャペーズのサン・マルタン教会

文芸評論家 饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）『恩寵の音楽』（音楽之友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。



サン・マルタン教会

ブルゴーニュ地方のマコンとシャロン・シュール・ソーヌの間にトゥルニュの町がある。このサン・フィリベール教会についてはすでにのべたが、そのトゥルニュから西へ県道14号をとり、やや丘の起伏の多い緑の谷を走ると20キロほどでシャペーズの村に着く。

少し遠くから、この地方には案外少い、初期地中海ロマネスク（一般にロンバルディア型という）に見られる、上の階ほど窓の数の多い大きな教会の塔が森の上に見えてくる。

ラングドック地方やルション地方、それにカタルーニア地方を歩いてきた私には懐しい塔の形である。まわりは寒村というにふさわしく、家々が散在している感じだ。このあたりは典型的なブルゴーニュ地方の風景であり、ゆるやかな丘をめぐる屈曲の多い道、果樹の下、広々とした牧草地に白いシャロレー種の牛たちがのんびりと寝そべっている。

私はこのサン・マルタン教会前に車をとめて少し離れたところにある家々の軒から教会を見上げる。33メートルの塔は、教会の交差部の上に、ピラミッド形に立っている。教会全体の長さや幅からすると均衡を失ったように思われるが、しかし、全体からみると安定感があり、大地に根差した建物という印象を与えるから不思議である。ピレネー山麓にあるサン・ジュスト教会を私は思い出した。それは高粱畑のまん中、濃緑の糸杉にかこまれ、夏の光を浴びて美しく、孤独だった……。

日本でも外国でも教会の塔は旅する人、巡礼者にとって、プールの言うように、「神の指」であり、案内の「星」のようなものだ。

教会の敷地は少し低い石の囲いがあり、内には草が生えている。そこに入ってまわりを歩いた。見上げると、高い塔へのぼってゆく梯子がついていて、まるで天国への階段のように見える。後陣の中央祭室は大きく凹凸している。（これは後代12世紀のもの）

建物自体は11世紀であるから、ブルゴーニュ地方ではトゥルニュのサン・フィリベール教会と並んできわめて古い。かつては小修道院に属していたのが、教会だけ残ったのである。本来はシャロンのサン・ピエール修道院の分院であった。

全体の印象からして素朴で重厚という感じがするが、それは内部空間へ入るといっそうつよくなる。サン・フィリベール教会のように均斉がとれ、美しくはないが、それでも石質の白さが室内を明るくし、殆ど無装飾にちかい空間の簡明さが私の心をとらえた。石は多少粗いが、巨大な円柱が柱頭の面だけややフラットになった形で重層感のある、幾分尖頭の天井を支えているのであった。柱頭の上に身廊の横断アーチとともにより小さな支えのつけ柱が複合柱のようになって天井に向っているのも特徴がある。

初期地中海ロマネスクはおそらく北イタリアのコモの方からと、南のローヌ河渓谷ぞいに北上しながらこのブルゴーニュの土地に伝えられてきたに違いない。しかし柱の円型はブルゴーニュ地

方の特徴であり、このサン・マルタン教会も、サン・フィリベール教会も、またファルジュの教会、それにジェラ地方のロン・ル・ソーヌエの教会も同じである。

しかし何よりも私には無装飾の教会というのが気に入っていた。かつてカタルーニア地方のサン・ヴィセンテ教会、あるいはルション地方のモンベリエに近い谷のどんづまりにあるサン・ギレーム・ル・デゼール教会に行った時のことを思い出していた。それらはいずれも初期の11世紀からの建物である。この時期のものは、先立つ、豪華なクリュニー系の教会に対する反動か、いずれも簡明であり、感覚のよこびを通してではなく、直接神に向かう姿勢を人々に与えてくれるのである。そしてまた、12世紀後期に多いシトー会修道院も無装飾を目ざして簡素・重厚な形をとる。私はこうしたロマネスクの前半と後半に魅せられていたのである。

それらは考えてみれば「精神」のありようの反映であり、またその革新なのだ。「グレゴリア改革」を柱としたクリュニー会修道院も時が経てば退廃する。シトー会修道院もまた14世紀以降同じである。だが、中世キリスト教の高揚は、どのような出発であれ、神を求め、「使徒的生活」の「精神」を目ざしたものであった筈である。

そんなことを考えながら、淡い光につつまれた白い空間を出て私は外の世界に戻った。まわりには中世以来、さして変わらない生活がある。牧草地と森、そして点在する農家とサン・マルタン教会のようなつましい建物。雨あがりの空を雲が流れてゆく。牛たちが牧草地の囲いに近いところにある水飲車に近づいてゆく。

私はとある農家の壁がくり抜いてあり、このマコン地方の白葡萄酒とその地方の愉しそうな地図がそこに入っているのを眺めながら車へと帰って行った。

Château de Chailly

シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、ゲルメスランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせは：(株)佐多商会ブルゴーニュ事業部へどうぞ
TEL:03-3586-3004 (東機質ビル内) 担当：岩沢、田中

